

篇十第期二第・『究研の理原双無』・

特250  
370

# 判審のルーウトスバ

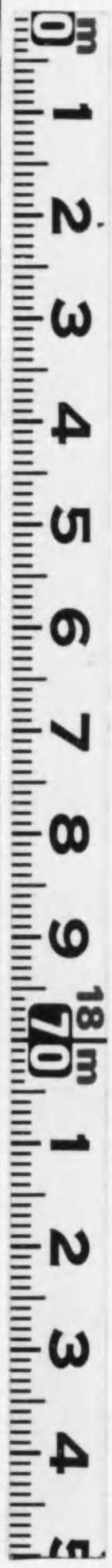
罪犯の「人恩大の類人」

判批の等法療病犬狂・法防豫病子粒微・法菌殺温低氏パ

著 一 如 澤 櫻



所究研理原双無



# 始



特 250  
370



パ  
ス  
ト  
ウ  
ー  
ル  
の  
審  
判

— 人類の大恩人の犯罪 —

櫻  
澤  
如  
一



## 判 審 の ル ー ッ ト ス パ

はしがき	(五)
一、十二月生れ	(五)
二、高等師範時代	(九)
三、ビオー先生の試験	(三)
四、酸酵とは何か	(一七)
五、無双原理の入口迄来て居た彼	(三)
六、酸酵の研究	(二六)
七、微粒子病を治さず	(二六)
八、生物自然發生説否定の功罪	(三五)
九、狂 犬 病	(三九)
十、光榮は幻影なり	(四五)
十一、免疫の原理	(五一)
十二、體質と中毒の原理	(五六)
十三、バストウールの犯罪	(六〇)
十四、人類を亡すものは人間なり	(六五)
十五、バストウールの教訓	(七一)
附録 食 の 秩 序	(七)

本書を読まれる方はぜひとも無双原理をよく頭に入れておいて頂かないとよく分らないでせう。それには「根本無双原理易」又は本書第一期第一篇「宇宙の秩序」を今一度くりかへして御良讀願ひます

## は し が き

櫻 澤 如 一

今、世界の新秩序が要望され、日本内地では英米ユダヤ的なるもの一切の排斥が叫ばれてます。二十年前私が若宮卯之助氏の日本新聞によつて西洋科學思想總攻撃を一人でやつた頃を思ふと、たゞ今昔の感にたえません。最近街頭から敵性文字、敵性言語が殆ど一掃され、雑誌「キング」でさへ「富士」と改題されました。しかし出版物を見ると大いに翻譯書が行はれてゐます。學校でも工場でも××でも、△△でもまだ(いや前より一層盛んに)西洋の學術が尊重されてゐます。つまり現下の敵性排斥は文字の排斥であつて思想や制度や技術の排斥ではない様です。明治維新の攘夷は勢力の排斥であつて物質や技術や制度は大歡迎の方でした。

私は文字や服装はさう大げさに排斥する必要はなく、むしろ技術や制度や學問等の根本である思想にこそメスを入れて『八紘爲宇』の精神即ちむすびの原則(統一の原理)に反する分析的、抽

象的、概念的な、或は生活を遊離した觀念や、生活を萎縮せしめる物質主義の正體と運命を指摘することが必要だと思ひます。

その意味で「人類の大恩人」と呼ばれ、全世界の賞讃をうけ、フランス第一の史的人物としてナポレオン以上に考へられてゐるパストウールの研究を書いて見ました。これは東京における無双原理長期講座第四回目の研究課題として、取扱つたものであります。例の如く大へんおそまつな書き放しであります。講座のテキストとして御らん下さる様お願します。尙、専門の方々の御叱正をお願申上げます。

## パストウールの審判

### 一、十二月生れ

「人類の大恩人」と云はれたルキ・パストウールとはドンナ人でせう？

彼は一八二二年十二月二十七日、フランスの東の國境に近い小さな村で生まれました。お父さんは皮ナメシ屋さんで、家は貧乏でした。彼は三人同胞の中のたつた一人の男の子でした。

學童時代の彼は陰氣な少年でした。

彼は畫がすきで、そして上手でした。

(こゝまで彼の傳記をよむと、たれでも無双原理をかじつた人なら、もう彼の性格と彼の一生の方向——つまり運命——が大よそ分るでせう。この始めの數行のうちに彼の一生、彼の仕事、彼の運命を判斷するに役立つことが少くとも五つは發見されたでせう)

彼は一八三八年十月、勉學のためにパリへ出發します。しかし十一月にはお父さんに伴はれて

歸つて來ます。彼は始めて親のもとをはなれると、すぐホームシックにかゝり、病氣になつたので、お父さんが心配して引取りに出かけたのです。これが十七歳の時です。

一八四〇年には近くの都會ブザンソンのある中學校へ入り、そこでバツカロレア——中學校卒業資格をとる準備をします。貧乏な彼はその間も寄宿舎の生徒の復習相手などしてお小遣をかせぐのです。フランスでは幼稚園から大學まで、そして大學院も、最高の學者を集めた學士院の特別講座もみな授業は無料です。

その上幼稚園ではおかしや食事や、時によるとシャツもパンツもクツ下も貰ふのです。そればかりでなく朝と夕方、子供たちの出入するときにはチャンとおまわりさんが表に立つて自動車の往來を止めて子供たちが無事に歸つて行くのを守ります。時々幼稚園付きの巡廻保健婦が家庭をたづねて來ます。お祭り、たとへばクリスマスなんかの御馳走とおみやげは大したものです。

國民學校と云ふのは八年制で、日本の小學校とはちがひ、筆、紙、インキ、ノート、教科書一切の學用品が支給され、修學旅行は五十人座席の豪華な大型旅行自動車數臺で、スバラシイものです。修業式、卒業式は劇場や公會堂で開かれ市長夫妻などが舞臺に着席し、生徒や父兄は觀覽席にギツシリつまります。オーケストラが始まり、合唱と賞品授與が交互に行はれます。四等賞

代表生が舞臺へ上つてゆくと拍手が起ります。山の様にもちきれない程賞品をもらつて下りて來ると、また拍手が起ります。二等賞、一等賞のときは音楽が始まります。そして市長夫妻から銀の月桂冠を頭につけてもらひキスをしてもらひます。優等賞の生徒は金の月桂冠、キス、拍手、山の様な賞品……

ほとんど賞品をもらはない子供はない位です。それがすむと餘興、本格的なギニョル（人形芝居——それは大ていイタヅラ小僧や悪漢が巡查を欺いたり、夕、キのめしたりするお芝居で、子供も大人もキャツ／＼と喜ぶ）や手品や曲藝。音樂會になることもあります。とてもなごやかな楽しい集ひです。たゞ卒業證書はもらへません。卒業證書は別に國家試験——國民學校卒業試験をパスしないともらへないので、これを取るには大てい二、三年かゝります。中には何歳になつてもパスしないのであきらめる人や、始めから修業證書だけであきらめる人もあります。この國民學校卒業證書はフランスでは相當ものを云ひます。それにまた日本の中等學校位の程度は充分あります。代數も幾何も物理學も化學もあるので……

國民學校卒業生は原則として上の學校へは入れません。國民學校は完全な常識——國民教育を與へるのが目的ですから（それ以上必要がないのです——國民として生きて行くためには）上の學

校へ行くのなら學齡に達すると初めからみな中學に入るのです。リセは十年になつてゐます。それがすむとまた中學卒業試験をうけ、それをパスするとすぐ大學に入れるのです。大學には入學試験がありません。よしあつたにしても日本の高等學校の様な殺人的な入學試験はありません。それでゐて大學はいつでもガランとしてゐます。ソルボンヌ大學など學生が少いのでおどろきまゐす。しかも三分の一は女性で半分は外國人です。それは西洋でインテリと云ふ階級が別に名譽あるものとは考へられてゐない、むしろその反對だと云ふ事情にもよるのです。(パリには百萬位の外人がゐます。佛國全人口の一割は外人なのです。こうなると、國家と云ふものに從來の様な意味がありません。だから戦争には勝たないのです。フランスがナチス・ドイツに敗られたのは負けたのではなく、勝たなかつただけなのです。武力で勝つたのは最後の勝利ではなく、文化や思想で勝つのが——それは二、三百年もかゝりませうが——ほんとうに勝つたので、武力に敗れて思想で勝つのを『負けるが勝ち』だと云ふワケです。もちろん始めにも最後にも勝つのもありますが、それがためには痛ましい犠牲が拂はなくてはなりません。(近代戦ともなると、武力での勝負はほとんどつかなくなるでせう)それはいやだと云ふのです。

とにかくルキは一八四〇年の八月(フランスでは六月が學年末で、新學年は秋の涼風が立つ頃始まります。だから落第生は夏中勉強して新學年の始まる前に再試験をうけることができる様になつてゐます)プザンソンで中等卒業試験(バツカローレア)をうけて通りました。

## 二 高等師範時代

バツカローレアを取ると、ルキはリセの復習教師にされ、バツカローレアを取るために勉強してゐる中學生たちの復習相手をする事になり、月々二十圓餘りのお手當をうける事になりました。そしてさらに高師入學の試験をうけるために特別講義をうけるのです。寄宿舎にゐて、費用を免除された上にお手當をもらふこの制度は廣く利用されてゐます。貧乏な家の子供はみなこれで樂々と勉強ができる國です。お金に困らない家の子供でも、あちらの青年は一般に獨立心が強いので、これをやるのが少くはありません。

日本でもルキ式の勉學をやつてゐる人が少くありません。最近私は××大使館の書記官×氏の訪問をうけましたが、聞けば×氏はある保險會社の給仕生活をしつゝ東京商業學校の夜學を二年

までやつたゞけで、遂に高校學校入學資格檢定試験を見事パスし、遂に獨力で高校から帝大を出た人です。この人はキツト十餘年後には諸君の耳に名が聞える人になられるでせう。

さてルキはすぐに高師の試験をうけず(▽)、一八四二年の夏になつて始めて試験をうけたのですが、合格者二十二人中、十五番と云ふ成績なので彼はもう一ケ年準備をすることにしました。二十一歳の彼です。

彼は十七歳でパリへ出た時、一ヶ月で泣いて逃げ出したベルギー塾に入り、又そこで復習相手をしながら高師入學の準備をするのです。こうした獨立生活をしながら彼は僅かな収入を妹たちの學費のために送金します。

復習教師の仕事は朝六時から七時まで、他の時間は自由なのです。その時間を利用して彼はソルボンヌ大學で化學や數學の講義などをききます。大學は無料で、誰でも通りがりに入れますから、冬など散歩に出たお爺さん、お婆さんなどが、寒い日には入つて来て、おもしろい講義を聞きながら、暖いスチームでウトリ／＼いゝ氣持になつてゐるのを私はよく見受けました。

一八四三年(二十二歳)四番の成績でルキは高師にパスした。

一八四四年(二十三歳)彼はパラ酒石酸に引きつけられる。酒石酸の溶液が偏光性をもつてゐるのにパラ酒石酸は偏光しないのです。この同じ性質、同じ元素でできてゐる鹽がちがつた物理學的性質をもつてゐるのが彼はふしぎでならない。大発見者、大發明者はたれでもこんな平凡な事實におどろきの目をみはるものです。おどろき、ふしぎさの發見——これがない人は不幸な一生を送ります。何を見てもふしぎにも思はず、おどろきもしない人は何物をも發見しない人です。何を見てもふしぎに思ふ人、おどろき(おそれではなく)驚異、驚嘆する人は何かを發見する人です。

酒石酸と云ふのはブドウ酒の中に出る石で、ラムネやその他の清涼飲料水にあの泡を吹かせるものです(酒石酸は▽か△か?)。これは一七七〇年に發見されたもの。パラ酒石酸は一八二〇年に偶然發見されたもの。ゲーリユサツクは二六年にこれをブドウ酸と命名しました。パラ酒石酸と命名したのはベルツエリウスです。

ルキは初めて出會つた「ふしぎな現象」にあくまで食ひ下ります。一八四六年(二十五歳)で教授の資格(アグレガシオン)を取つて了ふと彼は又もやこの問題に食ひ下り、何故酒石酸は偏光するのにパラ酒石酸は偏光しないか、と掘り下げます。ブドウ酒工場ではこのパラ酒石酸に困つて

ゐるのです。當時一流の化学者もこれには困つてゐます。……

研究を始めてから五年目に彼は、酒石酸鹽には右旋性があるのに、バラ酒石酸には旋光性のない理由をつひに発見しました。これが彼の幸運の開ける第一歩になつたのです。彼は顯微鏡を用ひてバラ酒石酸鹽の結晶を研究してゐる中に、左斜面體と右斜面體のあることを発見したのです。そしてそれを丹念、克明に二つに分けて見たのです。それから別々に溶かして見たのです。すると右旋性と左旋性の酒石酸が出て來た！ それを等分に合はせて溶かした液は偏光性をもたない中性のものだつた！ ルキはおどり上つて喜んだ！ これは一八四八年二月革命騒ぎの頃です。この喜びに飛び上つてゐるとき彼の母が腦溢血で死にます。彼は母の死目には會へなかつた。數週間彼は悲しみのドン底に沈みます。これが人生です。人はいつでも喜びの最中に悲しみに襲はれるのです。悲しみのうちに喜びが生れるのです。

### 三、ピオー先生の試験

彼の発見は師バラールの手によつてアカデミーの大家の間に發表されました。當時七十四歳の

ピオー博士はこれに耳をかたむけ、自らこの無名の青年バストウールを呼びよせ、目の前で實驗させます。正確性を重んずるアチラの人のヤリ口は感心です。

バラ酒石酸鹽を右旋性と左旋性の結晶にわけ、その溶液で左右の偏光を見事に別々に出して見せます。ピオーの感嘆と喜びはバストウールの第二の幸運を招きました。ピオー博士は科學學士院でこの発見を發表し、その後一生バストウールを吾子の如く愛し、指導します。無名の青年を助ける老大家ピオーの如き人が日本にもあるといふです。バストウールはそれからトン／＼拍子のウナギ登りで出世します。もちろん「ウナギ登り」だの「鯉のぼり」と云ふのは先輩や父兄やの力で出世することではありません。眞剣な努力であること「ウナギの無双原理」に書いた通りです。

一八四九年(二十八歳)ルキは東北のストラスブル大學の助教になりまゝ。着任するや否や(十五日目に!)總長ローラン氏の娘に結婚を申込みます。これが彼の一生の初めに見る大へん陽性な行動です。間もなく彼は結婚します。新夫人マリーはスバラシイ良妻で、研究にも、實驗にも、記録にも、助手として、秘書として、協力者として大いに活躍し、ルキは大へん助けられま



す。幸運な人です。然し幸運は必ず不運を伴つて来るものであることを忘れずに、彼の傳記をよみつけませう(陽あれば必ず陰ありと云ふこと)。

ルキは休みにはキット巴里に出てビオー先生に會ひます。一八五二年(三十一歳)には彼はビオー先生の宅でドイツの有名な化学者ミツチエルリヒとその協力者ローゼルに會つて益々酒石酸の研究に深入りする決心を固めます。そしてその年の九月、新學年の始まるまでに彼はブドー酸即ちバラ(ラセミ)酒石酸の探究のために、ドイツからオーストリア、イタリヤとブドー酒を造る工場や、酒石酸研究の大家を訪ねて廻ります。どうしたらバラ酒石酸を人造できるかを探究するためです。

一八五三年六月一日つひに彼はそれを人造する事を發見し、パリのビオー先生に電信を打ちます……『酒石酸よりラセミ酒石酸を分離することに成功せり』いよいよ大發見が完成したのです。一八四四年に研究を始めてから正に十年です。酒石酸の溶液を高い温度で長時間(175°C—20—30時間)熱して遂にバラ酒石酸を作ることを見出したのです。

この大發見は一五〇〇法の賞金と第五等文化勳章を彼にもたらしめました。大した名譽です。ルキの得意は想像するに餘りあるものです。

こゝで彼はビタリと無双原理に對面したのであります。それは次の如き有名な彼の言葉で十分想像されます——

『全宇宙は非對稱的である。生命とは宇宙の非對稱性の函数であるか又はその非對稱性から生れた結果の數である』

非對稱性と云ふのは全ての事物が反對性のものをもつてゐると云ふこと、右手を鏡に寫すと、左手の様に見える様に、すべてのものはその反對なものをもつてゐる。對稱的、對稱的ではない——右に對して左があり、上に對しては下があり、前に對しては後がある、と云ふ事を意味します。これが無双原理の陰陽なのです。無双原理はこの全宇宙の非對稱性をあらゆる現象や思想、物質界や精神界の指導原理として簡素な體系にまとめたものなのです。しかしパストゥールは惜しいかな！ 残念にも、全宇宙、全生命がこの非對稱性の函数だと云ひながら、事實はそれをただ化學の世界における、又彼の一生の扉口だけに發見して、その後はそれを忘れて了ひます。

一八四五年(三十三歳)彼は新しく出來たリール大學の化學部學長として迎へられます。その化學部の學生の中にアルコール製造家の息子がゐます。その父が、時々アルコールが變敗するので

困つてルキに相談に来ます。ルキはその原因を発見することを引受け、その工場に通ひ、例の如く顕微鏡をもつて研究に没頭します。ルキはまた持ち前のネバリをこの問題で發揮します。それが彼を、長い苦心の末つひに成功に導きます。

その當時、醱酵の理論として通用してゐたのはあの有名なユダヤ人、栄養學の元祖リービツヒの説で、すこぶる非科學的な想像説でした。ルキはまた顕微鏡をもち出し、醱酵菌と四つに取りくんで數年間ガンバリます。そして遂に醱酵が健全に進行してゐる間は小球型の菌ばかりだが、それが長い菌ばかりになると變敗して了ふ、と云ふ事實を発見します。

彼はリール大學化學部長として講義を始めたとき、醱酵の問題を取り上げたのですが、その時彼は「醱酵とはそも／＼何であるか？ 現象の神秘の特性である」と書いてゐる位で何も醱酵の本質については知らなかつたのです。（この醱酵の本質は現在でもまだ分りません。しかもあらゆる生命現象は醱酵の問題が分らない限りは分らないのです。おもしろいことではありませんか）

#### 四、醱酵とは何か

醱酵とは一體全體何でせう！

これがなかつたら世の中は大へんな事になります。酒も醬油も味噌も納豆も出来ません。あらゆる腐敗と云ふ現象が起りませんから、この地上は植物や動物の死骸で一ぱいになつて了ひます。この醱酵が小さな菌の力によつて行はれると云ふことを発見したのがルキ・パストウールです。

一八五七年に彼はリールの科學會にこれを發表します。數ヶ月後にそれは巴里の科學學士院に受けつけられます。その時彼の母校高等師範學校の經營が困難になつてゐるのを知り、リール大學の化學部學長と云ふ位置を棄て、母校に歸り、學校行政を引受け、理科部長を引受けます。その上、學生の栄養や健康の指導まで兼ねて引受けるのです。しかも彼は自分の研究を棄てはしません。リール大學よりはるかに貧弱な設備しかないのに彼は屋根裏の部屋で研究をつゞけるのです。

これを知つてビオー先生は愛する弟子の爲に大いに憤慨します。けれどもルキは學校の行政も

健康や栄養の指導も見事にやつてのけます。しかも研究はグン／＼進みます。この屋根裏の研究室で彼は乳酸醱酵の研究を完成するのです。パリの屋根の下の冬は寒く、夏はあつくたまらないあの生活をしない人にはこの苦勞が分りません。キュリー夫人の勉強も研究もルキと同じ様に悲惨な環境で完成されたのです。

この乳酸醱酵の研究論文は一八五七年末に科學アカデミーで採用されます。彼の三十六歳の時です。

一八五九年も醱酵研究に明けて、そして行く。その九月彼は長女を失ひます。

一八六〇年に科學アカデミーはルキに實驗生理學賞を與へます。ルキは「生と死の解決し難い神秘を破るために醱酵に関する研究に全力を」そゝいでゐるのです。この頃から彼は生物自然發生説の攻撃にかゝります。この論争はそれから二十年も三十年もつゞきます。……………

この頃、彼はまた糖、マンニツト、乳酸などが酪酸に變化するのを研究し、遂に小さな圓棒型菌(▽)が酸素(▽)なしに生きてゐること、空氣(▽)を一、二時間供給すれば死んで了ふことを發見しました。

醱酵の研究はつゞきます。ブドー酒の酸敗と云ふ問題にも當然ルキは注意します。當時フランスは年々ブドー酒の變敗で莫大な損害をうけてゐたのです。一八六三年の夏休みに、彼は三人の弟子をつれてアルポアへブドーの研究に出かけます。ブドー酒の變敗を研究するのに彼はブドーの栽培法から研究し始めるのです。それからあらゆる迫害、嘲笑をしのびつゝ、失敗に失敗を重ね、遂に酸敗菌がブドー酒を五十度から六十度の溫度にあたゝめる事で死滅することを發見しました。しかし世間の偏見やら嫉妬やら無關心やらを克服するために彼はまだ數年、不撓不屈の精神をもつて努力せねばならぬのでした。

その中恩師デューマ先生から彼は蠶の傳染病を救ふ様に頼まれるのです。當時フランスの養蠶業はワケの分らぬ傳染病で大きな打撃をうけて全滅に瀕してゐたのです。ところでパストウールは蠶のことはちつとも知らないのです。けれども彼は恩師のために一肌ぬぐことに決心します。彼は生れて始めて蠶に関する本や報告をよみます。傳染病は卵も、成蟲も、蛹も、蛾も犯すのです。これにかゝると蠶は褐色又は黒色の斑點を出して全て死んで了ひます。その傳染がとても早くて早いのです。この傳染病は微粒子病と呼ばれました。

それでフランスの養蠶家は蠶が全滅するのでロンバルチャから蠶種を買入れます。するとその

年は成功するのですが翌年はもうダメ、それでイタリヤやスペインやオーストリー、さてはギリシヤ、トルコ、コーカサス地方と追々遠方から毎年輸入しますが、みな全滅します。支那種もダメでした。一八六四年(元治元年)には健全なのは日本種だけになりました。

一八六五年六月ルキは農林大臣の依頼と云ふ肩書で養蠶の盛んなアレー地方に出張して研究にとりかゝります。それから五年間ルキは蠶の微粒子病と四つに取りくんだまゝ血と脂をしぼつて苦闘をつゞけます。その間の苦勞は並大抵なものではなく、彼の努力は全く驚くべきものでありました。その間には彼は父を失ひます。けれども農村の人々の悲嘆と苦惱を救ふために彼は奮闘を中止しません。

パリに歸りますと、末の娘が重病です。遂に娘は死にます。彼は悲しみを耐え忍びつゝ研究をつゞけます。その中、彼はナポレオン三世に招待されます。光榮な日が近づいて來たのです。いつても苦しみと喜びはつゞいて來ます。一八六六年には猛烈な蠶の研究です。その間に十二歳になる娘が死にます。マリイ夫人は秘書、助手、協力者としては良き妻ではありませんが、健全な子供を育てる良き母ではなかつた様です。バストウールは又しても愛するものゝ死に目にはあへませんでした。

養蠶の季節が終ると、彼はまたブドー酒の研究と報告書作製に没頭します。變敗を防ぐ方法——加熱法——は発見したのですが「それでは味がマヅクなる」、など云つて悪宣傳を放送し、卑劣な態度を示す人々があつて仲々一般には認められないのです。ブドー酒の研究にも、微粒子病の研究にも彼の最大の武器は、彼に最初の成功を齎らした顕微鏡でした。ルキは早朝から蠶の上に顔をのぞきこませて毎日々々日を送るのでした。

彼は遂に微粒子病を絶滅する方法を発見しました。顕微鏡で微粒子の有無をたしかめ、そのある蛾の生んだ卵は全て焼きすてることです。そこで彼は腦溢血でたほれます。一八六八年十月のことです。四七十歳の時です！(陽あれば必ず陰あり！)

一方、彼は政府から勳章や賞金を與へられ、大きな光榮につままれて了ひます。ブドー酒の變敗豫防、微粒子病の豫防などの成功です。それにつゞいてオーストリーの農林大臣や、ドイツの大學から賞金や名譽稱號を贈られます。そのトタンに大事件、母校の大騒動がおこつて彼は行政方面の仕事を辭任します。(陽は必ず陰を引く！)

## 五 無双原理の入口まで来てみた彼

文字通り悲喜交々至るルキ・パストウールの生涯はこゝいらで一段落となります。私はもつと詳しく彼の仕事——その悪戦悪闘、不撓不屈の努力、研究——を語りたいのですが、それは彼の傳記にゆづりませう。詳しく書けばこの本が少くとも千五百頁にもなりますから、大へん惜しいことですがそれはあきらめて、私はこゝいらで彼の生涯の一覽表を終りませう。

彼はこれから有名な炭疽病や狂犬病の研究にとりかゝり、また三十年近くも奮闘します。その詳しいお話は實に全ての科學的研究、科學者の運命の見本の様で興味深々たるものであります。どうか彼の傳記をよんで下さい。そして彼の傳記映畫『科學者の道』をごらん下さい。こゝで私共はいよゝ私共の研究を始めなくてはなりません。無双原理は一名『魔法の眼鏡』です。これで彼の一生を検討して見るのです。

先づバラ酒石酸の神秘の發見です。これが彼を無双原理の世界——陰陽の對應、親和、相補の

すなはちムスピの世界の入り口に伴れて行つたのです。しかし惜しい哉、彼は無双原理を知りませんでした。否、目の前にハツキリ、アリ〜と對應する陰陽の世界を見ながら、それに全宇宙の非對稱性(不同性——對立性)と云ふ名さへつけてをきながら、その上『その對立こそ全宇宙の本質である。生命とはこの全宇宙の非對稱性の函數であるか又はその非對稱性から生れた結果の函數である』とまで斷言し、確信しながら、その對立性、相補性、親和性そのものを極める事をしなかつたし、その體系を見出す事も出来なかつたのです。これは私から見れば彼の一生一代の不覺であり、彼の一生の不幸、最大の不幸を招いた原因でもあるのです。彼の一生の不幸と云ふのは娘たちを次から次と失つた事や、彼が四十六歳で腦溢血にたほれた事や、長い間澤山の論敵をもつた事やを云ふのではなく、實に彼が生きてゐる間に位は人臣をきはめ、名譽は世界に輝きすべての研究が完成したことなのです。なぜかと申せば彼が無双原理、宇宙の秩序、その法則を見落して顧みなかつたばかりに、彼の一生の努力と研究の成果が全くムダなものであつたばかりか、人類にとつて最も大きな罪惡とさへなつて了つたからです。彼がこの宇宙の根本原理をきわめてゐたら、彼の一生の努力は全くちがつた正反對の方向にむけられてゐたことせう。さすれば、彼の五十年以上にわたる克明な驚嘆すべき努力はドンナすばらしい成功を收めたか分りませ

ん。彼の偉大な成功と彼の勝ち得た大きな名譽が、とりも直さず人類全體に對して彼の犯した大なる罪惡とその不名譽の大きさに比例してゐるのです。と云つただけではお分りにならない方があるかもしれません——まだよく無双原理のお分りにならない方々の爲に、それをお話しよう、彼の研究の一つ／＼が無双原理から見るといかに他愛のない、易しい、つまらないものであつたかをもお話しませう——

無双原理を理解してゐられる人はこの本の始めの一行から、ほとんど一行ごとに宇宙の秩序の支配する手をあり／＼と發見されたでせう。たとへば「十二月にルキが生れた」と云ふ一行を見ても……或は「彼の父は革めし屋であつた」とか、「東部國境の山脈に近い地方で生れた」など云ふ處をよんでも……

ルキ・パストゥールでさへも發見した様にほんとうにあらゆる現象は、宇宙の秩序、陰陽の法則、無双原理を實地に教へる聖典であり、この宇宙全體からして無双原理大學校なのです。二宮尊徳がいみじくも「マコトの道は學ばずしておのづから知り、習はずしておのづから覺え、書籍もなく、記録もなく、師匠もなく、而して人々自得して忘れず。これぞマコトの道の本體なり。」

渴きて飲み、飢えて食ひ、勞れていね、さめて起く、皆このたぐひなり。それ記録もなく、書籍もなく、學ばず、習はずして明らかなる道にあらざればマコトの道にあらざるなり……」「それがわが道は天地をもつて經文とす」「かゝる尊き天地の經文を外にして、書籍の上に道を求むる學者輩の論説は取らざるなり」「よく／＼眼を開きて天地の經文を拜見し、これをマコトにするの道を探ぬべきなり……」など云つてゐるのはこのことです。

パラ酒石酸の本體を發見するためにパストゥールは十ヶ年の研究と、思索と、實驗と旅行を要しました。無双原理の魔法の眼鏡ですと、これは全く一時間も五分間もかゝりません。結晶や、偏光それ自身が陰陽を教へてくれるのですもの。

パストゥールが酒石酸鹽の溶液を高い温度に長時間おくとパラ酒石酸の結晶が出来るのを發見したのは實に感心です。なぜなら彼は無双原理を知らずにそれをしとげたのですから。その代り十ヶ年もかゝりました。もつとも無双原理を知らないと云つても、無双原理の簡素な體系を知らない、と云ふだけで、人は誰でも、尊徳の云つた様に學ばず習はずして大よそはこの世界が陰陽對立、相補性でできてゐることを知つてゐるのです。何分生れるときから死ぬるまで毎日々々陰

と陽の緯<sup>き</sup>緯<sup>き</sup>と經<sup>き</sup>緯<sup>き</sup>に織<sup>か</sup>られて行く自分の生命を見せつけられてゐるのですから——歩くにも右と左、呼吸にも出る息、入る息、日中と夜、夏と冬、活動と休息(睡眠)……………私共なら、先づ第一に酒石酸の沸き立ち、ふくれ、ガス體になる性質を見ると、あゝこれは陰性だナ、と感じます。だからバラ酒石酸の様な反對の結晶型を等分に含んでゐるために左右の旋光性を中和し、偏光しないのを見れば、バラ酒石酸の生成の條件が酒石酸のそれより陽性な條件でなくてはならないと云ふことはすぐ即座に念頭に浮びます。よし頭がどうかしてゐて、そんなことを考へなかつたとしても、先づ陰性か陽性かに生成の條件を變へて見るでせう。よしそれを間違つて陰性な條件で試して見たところで、半分しか間違つてゐないので。それでうまく行かなかつたら、すぐ陽性の方法をとつて見るでせう。もちろん實際にはそうやす／＼とうまくは行かないでせうが、それにしても十ヶ年はかゝらないでせう。

## 六、醱酵の研究

パストウールは醱酵の研究にも前後十年以上かけてゐます。しかもその主な発見は、(一)細菌

に球型と棒型のあること、(二)球型が棒型になるとブドウ酒やビールが變敗すること、(三)棒型菌の出現を防ぐには溫度を上げて暫く保つておくことの三點です。これを無双原理から見ますと(一)球型と棒型はその形が示す如くリツパに陽性と陰性でせう。アルコールは陰性ですから陽性な菌が役に立つのは當然でせう。よしそれが分らなくても、また陽性な菌がドンナ機能でアルコール醱酵を起すのか分らなくとも、少くとも陰性な棒菌を殺すためには陽性な溫度をもつてゆくとか、壓力を加へるとかすればよい事だけはすぐ分ります。もつと簡単に申せば、菌がサツパリ分らなくてもスツパクなると云ふこと自體が陰性になりすぎる事なのですから、それを防止するには陽性を用ひればよいのだと云ふことはすぐ分ります。

さればこそ東洋では昔から酒を作つて火入れと云ふことをやるのです。これはつまり、東洋の酒倉の無名の職人のうちにパストウールが一人や二人でなく澤山ゐたことを示すものでせう。我の如き全くの素人でも甘酒をこさえてスツパクなると溫度を上げてより以上スツパクなるのを止めたり、スツパクならないうちに、十分甘くなつた頃を見はからつて、溫度を上げて、醱酵を止めることを知つてゐます。元來、醱酵や農藝の様な生物學的な(生命的な)方面では日本人の技術は相當お世辭でなしに西洋の學者に重く見られてゐる様です。これは日本で日佛會館の館長を

したことがある巴里ソルボンヌ大學の教授ブラリゲン博士から私が直接に聞いた處でもありません。みそ、醬油、納豆、酒の類から盆栽や菊作りなどの方面です。これは日本人がウス／＼無意識的にも無双原理と云ふ生命の原則を知つてゐるからではないでせうか。何しろ古事記の始めからタカムスビ、カミムスビ陰陽二柱の神によつて萬物が生みなされたと云ふ、恐しく雄渾な、深遠な生命論理學や、宇宙の秩序、生命の原則を確認し、それを肇國の理想の如き國家構造や、小笠原流の様な禮儀作法、生活指導原理、さては四條流の様な料理法、華道、武道、書道、歌道等にまで簡易化、實用化した技倆は大したものです。これが現代人に理解されるのは何日のこと  
でせう!?

(二)球菌が棒菌になると云ことがもしあるとすれば、それを連続、不連続の問題を解決する鍵であり、無双原理定理第十一の實例であります。(三)についてはすでにお話しました。

## 七、微粒子病を治さずに

蠶の病氣は主に次の四つだと云はれます。

- 1 軟化病 (軟く透明になつて死ぬ病氣)
- 2 硬化病 (固くコロ／＼になつて死んで白くなる病氣)
- 3 微粒子病 (黒い痣ができて死ぬ病氣)
- 4 膿病 (ウミをもつて死ぬ病氣)

右についてはすべて未だにホントウの病原がハッキリ分らない様です。が無双原理から見ればいづれも單純なもので、従つて之を治すことや、なくする事もさして困難ではありません。人間の病氣より(食物が桑だけです)全て簡單で、はるかに治しやすいです。無双原理のお分りの方は試みに考へて御らんになると面白いでせう。

もちろん、いろ／＼な病原説がいろ／＼な學者によつて唱へられてはゐます。しかしいづれも對症的方法よりないところを見ると、みな根本的な病原をつかんでゐないので。詳しいお話をすれば一冊の本になるでせうから、今は割愛します。

さて問題の微粒子病です。パストウールが、この病によつて正に全滅せんとするフランス養蠶業を救ひ、そのためにフランスは數十億フランの利益をあげた、とはかねて聞いてゐました。それで私は彼の傳記をよむにあつて、この問題の詳細を知ること大へん興味をもつてかゝつた



のですが、全くアテがはずれ、ガツカリしたり、呆れたりしてゐます。と云ふのはパストウールはこの病氣を治す方法を發見したのでもなければ、ほんとうの原因を發見したのでもないからです。彼の有名な方法はこの病氣にかゝつた蠶の蛾をすりつぶして、黒痣の芽胞を發見し、その芽胞をもつ蛾や卵を一切焼きすてることなのです。この芽胞と云ふのはいはゞ黒痣のタネです。つまり彼の方法はこの病にかゝつた、或はこの病のタネをもつてゐるものを一切焼きすてる方法なのです。蠶だからいゝ様なものゝ、人間だつたら大へんなことです。例へば結核又はそのタネである結核菌をもつた人間をみな焼き殺す方法なのです。

パストウールは微粒子病やその芽胞(タネ)をもつてゐる蠶の蛾やそれが生みつけた卵をみな一顯微鏡で探して焼きすてるのです。なぜそんな芽胞を生みつける様な微生物に犯されるのかはユメにも發見してゐません。その上、それにかゝつたものを治す方法をも發見してゐないのです。たゞ焼き殺して了ふと云ふ過激な手段を考へついたゞけです。これちや養蠶業は救はれたかもしれませんが、蠶は焼き殺されたのです。そして毎年々々無數に殺されて行くのです。

無双原理を應用して見ればこれは蠶の他の全ての病氣と同様、わけもなく防ぐことも治すことも出来るはずです。私はまだ實驗はしてゐませんが、ハッキリこう斷言できます。十數萬人

の人間の病氣を治した體驗から自信を十二分にもつて斷言するのです。すなはち、細菌と云ふものは大體カビの様な條件のもとで伸びるのでから陰性なものです。ことにこの病原體やその芽胞は極陰性なのです。それだから一〇—一五ミクロンから一五〇ミクロン以上もある長い極絲を出すのです。それが發育し活動するのはそれに適當な陽性の條件(環境)があるからです。つまり室の溫度が適當に高くなるなど云ふ條件が刺戟し發育せしめるのです。

またこんな極陰性病原體が發生する原因は陰性な條件(食物)すなはち桑です。桑が陰性になりすぎてゐるのです。その原因は桑の肥料です。キツト陰性の人造肥料(たとへば磷酸や加里)をたくさん使ふからでせう。この二點を改めれば、この病氣は全くワケもなく自然消失するでせう。或は發育不全になるでせう。こんな簡単なことゝ、即ち桑に陰性の人造肥料をやらないことゝ、蠶の室の溫度を高くしないことによつて微粒子病は完全に防ぐことができます。そしてあの厄介な、病蠶の屍體、糞、脱皮、病蛾の尿、鱗粉などを焼きすてたり、蠶室や、蠶具を消毒したり、蠶種を洗滌したり、病蛾を検鏡したり、そんなにしても尙發生する病氣を防ぐために、卵の一部を早く催青させて、その蟻蠶を摺り潰して再検査をこゝろみたりする一切の仕事が省かれるのです。

こんな方法は自然の秩序に法る方法でありますから、自然と病がなくなるのです。病氣を治すのはいけません。自然となくなるのでなくはいけません。一見したところ、これは豫防醫學豫防法の様にも見えるのでせうが、決して豫防法ではありません。これは健康法なのです。いや健全生活法なのです。治療醫學は豫防醫學へ、豫防醫學は健康法へ、それから健全生活が確立されるのです。健全生活の指導原理をもつてゐない人は仕方なく豫防醫學を、豫防醫學も完全でなければこそ治療醫學が必要になつてくるのです。その治療醫學もない暗黒時代には、病者を隔離するか、殺すと云ふ蠻的な方法をとります。パストウールの微粒子豫防法と呼ばれるものは實はこの虐殺、皆殺し、焼殺し法にすぎません。蠶や家畜の醫學は人間のよりよほどをくれてゐるのでせう。いや人間の醫學も英米ユダヤ西洋醫學ではまだ治療醫學時代です。

(一)焼殺し、隔離醫學の時代——(二)治療醫學の時代——(三)豫防醫學の時代。この三段階はそれ／＼長い時代ですが、その指導精神は一貫して全く同じ「焼殺し、みな殺し、隔離」であります。現代の英米ユダヤ西洋醫學の治療や豫防に用ひられるあらゆる薬物は毒物であり、あらゆる手段は科學的つまり自然征服主義、人間中心主義、醫學的天動説であります。すべての薬物は消毒即ち殺菌をネラつてゐます。つまり自分のために他を虐殺する英米ユダヤの唯物ユダヤ自然

征服の享樂主義の作品であります。これに反して東洋の健全生活指導原理は全く對蹠的な自然道順主義、神様至上主義(神ながらの道)であつて、内觀、反省的、さんげ主義、贖罪主義で、つまり病氣は生物の罪惡に對する神様のお叱りだと見るのです。だから悔ひ改め、(實は食ひ改め)だけでいゝのです。つまり東洋風、日本風では病氣とは神様の秩序、すなはち宇宙の秩序を亂した罰なのです。

宇宙の秩序(無双原理の研究叢書第一期第一篇参照)は嚴然として寸毫も犯すことを許されません。それははて知れぬ澄みわたる大空、虚空の様なもので誰かゞそれを亂すためにゴミやホコリや煤煙を立てたところで、よし萬丈の紅塵、煤煙、爆薬を投げ上げたところで、少しも亂されたり、汚されたりするものではありません。すぐそれはもとの如く澄み歸りますし、よし一部分がいつまでも亂れ汚されてゐるにしても、それは大空それ自身が汚れ亂れてゐるのでなく、汚れや亂れは實はその煤煙、ゴミ、戦塵、硝煙の匂、爆破の音だけなのです。それにその煤煙や戦塵を静めようとして、大仕掛けな煤煙吸收法や爆音消音装置を考へ出すのが治療醫學、完成された豫防醫學で、完成されないパストウール流の豫防法は、その煤煙や爆騒音をなくするために、更に大砲をうつたり、飛行機で追ひ散したりする様なものでせう。大砲をうてばお金も手間もか

ゝるし、追ひ散した煤煙や爆音は他の場所を亂すだけでせう。風向きが變れば又もどつて來ますし、それでなくても毎日々々次から次へと煤煙や、チリ、ホコリ、爆音をつくり出すのでは大へんなことせう。

自然追順、神至上主義、(つまり敬神——神ながらの道)反省主義(これは生活を遊離し、概念に走ると禁欲主義になります。それは大きな間違ひです。注意を要します)罪ほろぼし、さんげ主義は煤煙や騒音をたてない様な生活です。つまりおとなしくするのは、それも煤煙や紅塵を恐れたり、嫌つたりするからではなく、宇宙の秩序を亂す罪を犯すことを恐れるからなのです。つまり病氣を恐れ、逃げんがためではなく、宇宙の秩序を追順讃美せんがためであります。

結局、パストウールの『微粒子豫防法』は西洋英米ユダヤの醫學と同じ科學的な、枝葉末節的で間に合はせぬゴマカシ法であつたのです。他の彼の發明した方法がすべてこれと同じやり方なのです。

## 八、生物自然發生説否定の功罪

昔はアリストートルの如き學者、科學者、哲學者も、大衆も、詩人も、生物が自然に生れると云ふことを信じてゐました。ところが十七世紀頃になると有名な學者ファン・ヘルモントの様な人が『小麦粉かチーズの入つた壺の中に汚れたシャツを入れておけば二十日鼠が生れる』と云ひ出しました。するとあるイタリアの學者は「腐つた肉から蛆がわくのはハイが卵を生みつけるからだ、チーズや汚れたシャツから鼠がわくなどゝはウソだ。自然發生などあるワケはない」と實驗的に生物自然發生説を否定しました。そこで論争の旋風がまきおこされました。

十七世紀の末に、顯微鏡が發明されると、ふしぎなことに自然發生説が勢力をもちかへして、『こんな小さな生物が何處から來るか! 自然に發生すると云ふより外に説明はできまい!』と叫び立てました。こんな大上段の構へはいつでも真正面から反對をうけるのが運命です。たちまちイタリアの僧スプランツァニは反攻の火ブタを切ります。するとイギリスの僧ニードムはフランスの有名な學者ビュフォンと共同戦線をはり、スプランツァニを攻撃します。多くの學者が二

組に別れて思ひ／＼にこの論争に参加します。ヴォルテールの様な哲學者兼藝術家ジャーナリストまで参加しますからこの論争は三面ダネにまでなり、世間話にまでなつて了ひます。

スプランツアニは完全に密閉し煮沸した容器の中では微生物が発生しない事を實驗的に證明します。しかしいづれにしてもこの論争は結末がなか／＼つきません。そして十七世紀から十八世紀をへて十九世紀になつてもまだつきまします。研究好きなバストウールがこの論争に大役を買つて出ないではゐません。彼は例によつて顯微鏡と實際を引下げて堂々とこの三百年にわたる論争を買つて出ます。一八五八年のことであります。三十七歳の彼です。若い彼はすぐ片付けられると思つてこの論争に加つたのですが、何分三世紀にもわたる大論争で遂にこれ二十年も彼はこの問題のために苦勞します。彼は彼一流の實驗と研究で、手ゴワイ論敵を克明に征服します。この時彼の用いた武器が有名なツルの首型の瓶です。これに肉汁を入れ、充分殺菌した上で空気を追ひ出してからツルの首の先端クチバシの處を焼いて封じ或は地下室、或は街頭に、或はアルプスまで馬で數十ヶ運び上げ、そこで口を切つて空気を吸ひこませ、又元の様にクチバシを焼いて封じて持ち歸ります。そして空氣が所によつて細菌を多く、或は少くふくんでゐること、或は殆どもつてゐないことを立證します。

敵もさる者で、ナカ／＼この世界的學界總動員の論争は結末がつきません。一勝一敗、猛烈な戦ひが展開します。つひにバストウールは勝ちます。彼によつて生物自然發生説はつひに完然に否定されたのであります。そして彼は賞讃と光榮に包まれます。後になつて、この頃のことを彼に聞いた人に、彼は「科學者は非難も賞讃も氣にとめるべきではない。百年の後如何に見られるかを憂ふべきである」と云つたさうです。また百年にならないうちに、私の様なものが出てトヤカク云ふことを彼は豫感してゐたのかもしれない。

生物自然發生説を大觀しますと、實に變なものです。アリストテレスなど、昔の人の考へてゐた生物自然發生説とバストウールの否定したのとは全く別物なのです。昔のギリシヤの哲人たちは生物が自然に發生したと信じてゐたのです。その自然發生と云ふのは特別な製造家や工場がなく、大自然から何時とはなしに、ふしぎな力(或は神)によつて生れた、と云ふほどの意味でした。「神」とか「自然」とか云ふ考へも中世紀以後のヨーロッパの人々、ことに科學者の考へとは内容がよほどちがつてゐます。それを中世紀の僧や學者の一部は間違つて、大自然を瓶の中や壺の中だと思つて了つたのです。これは大きなまちがひであります。それを否定したバストウールの

實驗と論説も同じくまちがつてゐます。パストウールは第一、僧や論敵の學者らが「大自然を瓶や、壺と取りちがへてゐること」を指摘しませんでした。第二、細菌の起源については一言もふれず、又考へてもゐないのです。

だからパストウールは滅菌した瓶や壺の中では細菌が發生も繁殖もしないことは立證しましたけれど、本來の正しい意味の自然發生説については一言もふれてはゐないのです。現在の科學者や細菌學者でも生物自然發生説は抹殺されたものと單純に思ひ込んでゐる様ですが、彼らはパストウール及その同時代の人々と同様、全く本來の自然發生説については何も知つてはゐないし、又考へてもゐないのです。今日でも科學全體がまだ生物や生命の起源については全くの無知であるのです。進化論にしても全く同様です。これは實に驚くべき大きな無知であります。

間ちがへば間ちがふものです。キリストは人間を羊にたとへたと云ひますが、實によく考へたものです。人間も羊の様に先頭の二匹が間ちがつて谷へおち込むと、あとにつゞく何百、何千と云ふ人がみなつゞいて飛びこんで死んで了ふのです。

パストウールが否定したのはインチキの生物自然發生論でした。だから別に大した功名手柄に

はなりません。その代り彼の否定論が、この程度で終つてゐれば大した罪もならずにすんだのでせう。が不幸なことに、彼の研究は遂に細菌學を生み、免疫學を生むに至つて、遂に人類に未曾有の大害毒を流すことになつて了つたのはゼヒもないことと云へ、残念なことでもあります。

尙、後日、狂犬病を研究したときにも彼は狂犬病の原因は狂犬病毒を出す微生物であつて、狂犬病は自然に發生するものではない、その證據に狂犬病のない國もある、だから狂犬病は最初に一匹狂犬病がゐるから流行するのだ、と斷言してゐます。これが又大へんな間違ひであることは皆さんにはお分りでせう。狂犬病の原因の微生物は彼の幻影でしたし、狂犬病のない國のあることと、最初の病犬の出現と、咬まれても狂犬病にならないものがあることは、彼の説が全く大まかがひであることを最も雄辯に物語るものであります。

## 九、狂 犬 病

パストウールに最後のそして最大の光榮をもたらしたのは彼の狂犬病ワクチンの完成でせう。彼は狂犬病の研究を一八八〇年(五十九歳)から始めました。狂犬病は西洋には昔からよくある聞

くだに恐しい病氣であります。(しかし日本には殆どなかつたものです)

元陸軍々醫であつたプーレルと云ふ人から最初二匹の狂犬がバストウールの實驗室に贈られました。プーレルと云ふ人は狂犬を收容して保護してゐる奇特な人でした。彼は狂犬病の豫防法を發明しました。それは狂犬の齒をけづつて丸くする方法でした。しかしこれは全ての犬に實施することができないので實用にはなりません。彼は「狂犬の原因とその法則は今日の科學の力によつては明らかにすることができないものであるから、そのまま放置しておくより外はない」と發表してゐます。

狂犬病と云ふのは恐しい病氣で、これにかゝつた犬は「兩耳と尾をたれて。うづむき加減に血相をかへ、眞直に走つて来て」何物をでも咬み廻はると云はれます。狂つた犬です。これに咬まれると「二週間から數ヶ月、時としては二年もたつて發病する。發病したら絶対に助かる見込みがない。この病氣は腦髓を麻痺させ、ノドと呼吸筋をケイレンさせる。大へん熱が出るので非常に水を欲するが、のまうとすると忽ちケイレンをおこし苦しみ出し叫び出す。その聲が犬ににくる。まさに地獄の苦しみである。こゝから恐水病と云ふ名がつけられた。患者は病勢がずゝむと水と云ふコトバを聞いたゞけでも飛び上る」と云はれる恐しい病氣です。

後に「人類の恩人」と云はれる様になつたバストウールは最後にこの狂犬病とガツチリ取り組んだのです。

狂犬病については當時いろ／＼な假説があつて全く異説紛々ホントウの事はサツパリ分つてゐません。たゞ分つてゐたのは犬のツバキの中に毒があるらしいと云ふこと、咬まれたら數日から數ヶ月に發病する、と云ふことくらいでした。こんな區々たる異説と混亂しかない大問題にバストウールは勇ましくも正面から飛び込むのです。彼は一八八〇年十二月にある病院で五歳の兒が犬に咬まれて一ヶ月後に二十四時間ケイレン、苦悶の末、腦症を起し、ロ一杯の粘液で窒息して死んだときの報告を見、その兒の死後四時間、その口中の粘液を貰つて水にませ、數匹の兎に注射しました。兎は三十六時間以内に死んで了ひます。こんどはその兎のツバキを他の兎に注射して見ると、ヤハリ同じ様に兎は死にます。バストウールは死んだ兎の血を例の顯微鏡で研究してそこに一種の微生物を發見し、これを犢のブイヨンで培養し、それを犬や兎に注射して同じ様な結果を得ます。死んだ犬や兎の血の中にはいつでも同じ微生物が見出される。

(一) ふしぎなのは咬まれた場合には數日、數ヶ月も後に發病するの、病菌注射のときにはどうしてこんなに早く出るのでせう？(いゝ問題です。P・U研究者は即座に答へられるはずで

す)

(一) 狂犬病毒は好んで脳髓、ことに延髄や背髄を犯します(犬やことに兎の足、とくに後足がよくやられるのはその證據です)これはなぜでせう。P・Uの研究者は即答できるでせう)

(二) 病毒は犬から猿へうつすと弱くなり、兎にうつすと強烈になります。

以上三つはパストウールにも大きな謎で、これは分らないと云つてゐます。無双原理の研究者には面白いほどスラ／＼お分りでせう。

パストウールは狂犬病の豫防ワクチンを作ることには始めは考へてゐたらしいのです。然し乍ら、そんなものを作つて全ての犬(フランスだけでも二百五十萬匹もゐますから)に注射することは全く不可能でした。そんなワクチンはブーレルの考へた豫防法(全ての犬の齒を丸く削つて了ふこと)と同様實用にはなりません。それに豫防注射は何回もしなくてはなりません。犬を一定期間收容する場所が大へんです。それから熟練した注射係が必要で……それで彼は狂犬に咬まれた人々の發病を防止する事を考へなくてはならなくなりました。ところでナカ／＼困難があります。まづ試験し研究する犬を收容する場所を見つけなくてはなりません。第一にムードンの森

にネライをつけますが、地元の村民の大反對でオヂヤン……それからそれとパストウールはいろいろな困難にあひます。人類を救済することを目的とするパストウールにとつて、何と云ふいだたしい日が長くつゞいたこととせう。(それが實は神様の恵みの手でした)

一八八五年三月(もう研究をはじめて五年目です)まだパストウールは人間にワクチンを試みる確信がありません。動物試験を重ねてゐます。五月に五十頭の犬を手に入れると、狂犬病で死亡した兎の背髄を十四日間もフロスコの中で乾燥して毒を失つたときに取り出し、これの混和液を作つて、犬に注射します。それから追々毒性の強いのを注射、最後には死んだばかりの兎の背髄液を注射します。すると犬はもう免疫になつてゐるのです。しかしなぜ免疫が出来るのかと云ふ問題は分らないのです。これはしかしパストウールの發明ではありません。彼より百年も前にジエンナーが種痘を考へついたのでお手本であり、その後いろ／＼な學者がこの方法をいろ／＼な病氣に試みてゐる例があるのです。ジエンナーはこれを一農婦から教へられたのであり、この種痘の原理は數百年前に支那人から教へられたものだと言ふことになつてゐます。

パストウールはこの免疫について獨特の理論を組み立てましたが、それはもう今日では廢棄さ

れてゐます。今日の免疫の理論は体内に注射された毒物、異物は、細胞を刺戟して抗毒素を作らせ、これが作用して病毒を喰ひとめるのだと云ふことになつてゐます。但しまだこれは一つの假説であつて、誰もまだそんな抗毒素など云ふものを取り出して見た人は一人もありません。アランヂイ博士の如きはこの免疫學說を一つの空想にすぎないと云つてゐます。(『西洋醫學の新傾向』参照)

七月、狂犬に咬まれたある少年に對し、彼は醫師でないのに、たゞさへ非難を相當うけてゐながら、きびしい法律を破つて、つひに狂犬病ワクチンを注射します。そして二週間も、心配で眠られない夜を傍につき切りで看護し、つひにこの少年を救ひました。そこで彼の名聲は俄然、新聞の特ダネとなつて世界中に傳へられます。世界各国から續々狂犬病の人々が押しかけて來ます……ロシヤからも、アメリカからも……

彼はもう最後の光榮につゝまれ、生きながら神様の様に尊敬され、方々の國際的な學會へ招待され、貴族、國王の様な待遇をうけ、各國政府から勳位や勳章を送られ、フランス政府からは終身年金や養老資金をもらつた上、パストウール研究所設立の議がきまります。六十四歳の彼はつ

ひに科學者として最高の光榮に包まれました。翌々年には開所式が盛大に行はれ、一八九二年の滿七十年祝賀には大統領も各國の代表も参加します。一八九四年には研究所が完成します。そして彼はその年の秋此の世を去りました。

## 一〇、光榮は幻影なり

これで彼の一生は終わりました。以下今少し彼の業績を検討して見ませう。――

(一) 彼は狂犬病の微生物を發見したと思つてゐたのですが、今日では認められてゐません。これは彼の最大の武器顯微鏡の作り出した幻影でした。「よく泳ぐものは水に溺る」のたぐひで人はたれでもお得意のものでとんだ失敗を招いたり、或は死んだりするものです。恐しいことでよく氣をつけねばなりません。劍に強い人が劍に死に、法律に明るい人が法にふれる様なものです。ビタミンで成功すると何でも彼でもビタミンで解決出来ると思ひ込んだり、ズルホアミン劑で少し病人を治すと、あらゆる病氣にズルホアミン劑を用ひたり、するのです。梅毒を少しばか



り研究した人が全ての人を梅毒患者と見るのも同様です。好物で死ぬ人もたくさんあります。(ただP・Uだけはこの偏つた行きすぎを招くものではありません。それはいつでも反対の極と、兩極の統一の原理を教へるのですから。それはいつでも偏りを治して行くのが特徴ですから……)

(二) パストウールは澤山の犬を観察してゐる中に病毒が神経中樞、とくに延髄や背髄を犯すものだと思ふ確信を得ました。これは實にスバラシイ観察力です。(大脳、小脳、延髄、背髄の大きさと位置の陰陽差の分るP・U研究者なれば何でもありませんが——あゝ彼がP・Uを知つてゐたら！)

(三) そこで彼は病毒の皮下注射ばかりやらすに犬や兎の頭蓋骨をドリルで切りとり、穴をあけ、脳髓に注射を試みました。これは大變だつたでせう。咬みつかれない様にするだけでも大へんです。それにクロ、フォルムをかゞせたり、あのムゴトラシイ固定器にしばりつけたり……しかしこれをやるとタシカニ病氣は早く起ります。こうして頭に穴をあけて病毒を注射することを連続的に百回もつゞけると、兎はもう注射後七日以内に確實に發病する様になりました。P・Uを知らずにこの方法を發見したのは全く彼の熱心さ、眞剣さを示します。感心します。しかしそのワケはパストウールにはよく分つてゐない様です。P・Uと云ふ魔法の眼鏡をかけてゐる讀

者は「ハ、ア、ナルホド」と膝をうつて、ニツコリなさるでせう。

(四) 頭蓋骨の穴あけは驚くべき洞察力であります。病毒を強め、發病を早くしたのは大成功であります。しかし今度は病毒を弱めなくてはならないのです。これが成功しなければ、こゝまでの苦心は全く水の泡です。そこで彼の思ひついた方法がまた實にスバラシイのです。彼は猛烈な病毒に犯された犬の背髄(▲)の一切を廣い瓶の中につるし、その底に苛性カリウム(▽)を入れるのです。何と云ふスバラシイ考へでせう。まるでP・U魔法の眼鏡をかけてゐる人の様ではありませんか!!! もつとも彼はこれを只單に空氣を乾燥するためにだけ思ひついたものではありませんが。この章の始めから注意深くP・Uの魔法の眼鏡で一句々々を讀んで來た人はもうイヤと云ふほど狂犬病の正體(極陽性)(この第九章の始めから横に○をつけた句がこれを解く鍵でした)が分つてゐるので、この苛性カリウムと云ふ極陰性をパストウールが用ひたことには恐らく「ウーム!」と低いウメキ聲を出すほど感嘆されたこととせう!

背髄は乾けばかわくほど毒を失ひます。十四日後には全く毒性をなくして了ひます。あゝ! 十四日です! ヤハリこの「人類の大恩人」は魔法の眼鏡はかけてゐないのです。彼は無双原理宇宙の秩序と云ふ大きな神秘的な手によつて時々引きづり廻はされてゐるのです。それにつけても

私共は何と云ふ幸せ者でせう。

かく病毒を十四日間も弱め切つた背髄の微粉の混和液を犬に注射してからその次の日には、十三日弱めた毒を注射し、その次ぎの日には十二日目の病毒を注射すると云ふ風に追々強いのを、つひには全く新しい猛毒を注射するのです。そして最後にこの犬を狂犬に咬ませて見ると注射された犬はもう免疫になつてゐるので平氣なのです。さあ有名な狂犬病豫防法は完成しました。これは西洋醫學全體を貫く「以毒制毒」(CONTRAIA CONTRARIIS CURANTUR)の原理の最高峰です。この原理が只今狂犬に咬まれたときに、その發病を豫防するためにも應用されることになつたのです。狂犬病の發病は咬まれてから數日、數ヶ月、時としては二ケ年も三ケ年も廿年も卅年も遅れますから、この方法が咬まれてからでも有效(實は無用有害)にもなるのです。

つひにパストウールはその生涯の最後をかざる最大の光榮を獲得しました。しかし彼は病原體の病原體がウイルスである事を證明したのですが、ウイルスそのものがまだ正體が分らないこと遺傳學説におけるゲーンと同様です。だからこれはリツパな一つの大きな未知數であり、幻影であると斷言してもいゝのです。パストウールのエライのはこのワケも正體も分らない病原を追ひ

込めて發病の豫防接種に成功したことであり、それなればこそ最も偉大なる成功だ、と云はれてゐます。おもしろいでせう。ワケ分らずの成功がはたして偉大なる成功たりうるでせうか？ ソナ事もあるかもしれないませんが、大抵は間もなく正體が分ると無茶苦茶な成功であつたことすなはち大へんな間違であつたことが分り、偉大なる成功が最大の罪惡になるのです。私共はよくこんな間違ひをやりませう。恐るべきは無原理、無方針であります。こんな間違ひは歴史にも社會のいろ／＼な事業にもよく見受けられるでせう。

あの何千と云ふ發明を完成し、現代文化生活の大恩人と云はれたエヂソン發明王はその盛大な八十歳記念祝賀祭の日に「かくも多數の發明にもかゝらず人類が昔とくらべてチツトモ幸福になつた様に見えないのは一體全體何うしたワケだらう」と嘆きました。アインシュタインもアメリカに亡命してから「かくも偉大な、人類未曾有の科學の進歩にもかゝらず、人間はどうしていつまでもコンナに悲惨な運命を辿らねばならないのだらう」あゝ止んぬる哉と嘆嗟したと云はれます。

一生の終りに、數十年の死闘を顧み、つひに完成した事業の黄金時代を目の前に見つゝ淋しい氣持ちに壓しつけられて「あゝ人生と云ふものは何とツマラナイものだなあ！」と云ひつゝ死ん

で行く人も少くはありません。

あのコダックの成功者イーストマンがその一人です。彼の出世物語はエヂソンやロツクフェラーのに比べてまさるとも劣るものではありません。實に血と脂で書きつゞられた一生です。そして遂に人口八十萬のコダック市を完成し、絢爛をきはめたイーストマン劇場や、美しいコダック公園や、數千人の職工の働く地下工場や、一日數百萬呎のフィルムを作り出す近代的科學の精華を集めた工場や、あの心にくいまで巧妙なコダカラー（天然色フィルム）あのデイスニーのミッキーマウスの映畫）を作り出す様な科學研究所を作り、現代科學を完全に奴隸として驅使する資本主義工業の大王國を建設したのに、その中でイーストマンは不幸な苦しい、退屈さに壓しつぶされてピストル自殺をしてしまいました。

日本にもたくさんあります。大事業家や、大政治家や、大學者で功成り名遂げた上悲しいみじめな晩年を送つてゐる人々や、送つた人々を私は何人でも數へることができません。しかもそんな人々の畢生の事業は彼らの死後にバタ／＼と崩れて行き、見る／＼中に跡方もなくなります。もつと氣の毒なのは、數十年の死闘によつて辛くもかち得た偉大な光榮が氷の様に凍つて了ひ、生きながらそれを背負つてゐる苦しさで沈んでゐる人々です。

幸福と云ふものは宇宙の秩序、心と物、宗教と科學、東洋精神と西洋思想を統一する原理を體得してゐない人には想像することさへできないのであります。そんな人々のネライは必ず大部分は幸なしの「福」すなはち物質的な世界の幻影ばかりなのです。精神なき肉體ばかりなのですから、つまり「死」そのものより得ることはできないのです。「幸」ばかりをネラフ觀念論者もまた同じ結果です。福のない「幸」は、肉體なき精神ですから、それがたとへ極樂や天國の様に楽しい美しい世界であつても、つゞまるところは幻影、空想に終ります。

## 一一、免疫の原理

私は科學の技術を知りません。細菌學も知りません。素人であることが私の最大のホコリです。淺學が専門です。けれどもヴァレリー・ラドの「バストウール傳」一千頁を読みゆくほどに私の眼にかゝつてゐる、いや私の肉眼になつて了つてゐる無双原理と云ふ魔法のメガネはその一頁々に、その一行々にあまりにもフシギなものを發見するのです。それはおもしろくてタマラナイ程です。その一句々々を詳しくお話することは時間と紙とお金が許してくれません。願は

くは皆さんが魔法の眼鏡をおかけになつて彼の傳記をおよみ下さる事です。いや彼の傳記に限つたことはありません。あらゆる偉大な人の記録や偉大な藝術を御らん下さる事です。私はこの小さな本では大まかなお話しかできません。キツト誤解されたり、笑はれたりすることもあつてせう。止むを得ません。もうこゝいらで最後としませう。

私がルキ・パストウールの傳記をいろ／＼よんで感嘆し、感激するのは彼の眞剣さです。その克明な努力、不撓不屈の意力です。彼の一生から私がゼヒトモ學びかつ實行したいのはこんな偉人や、あらゆるものを生み出す貧乏の偉大性に對する確信と尊重です、貧乏こそ最も偉大なる母性であります。あゝ貧しきものは幸せなる哉！そしてその貧乏を偉大なものにするマコト、無双原理を體得することです。これなしには折角の努力も偉大なる間違ひや、最大なる罪惡と害毒を招くばかりであると云ふことです。

そしてまた如何に偉大な事業でも、世に出るまでにはあらゆる壓迫や迫害や中傷をうけずにはゐないと云ふことです。最大の壓迫と迫害、最大の苦難をうけなかつたら偉大な事業ではないのだ、と云つても過言ではないと云ふことです。いや、最大の苦難が（貧乏のドン底生活と同じ様

に）最大の事業を生むのです。貧乏は偉大な母性であり、苦難迫害は偉大な父であります。これを教へてくれる意味で「パストウール傳」が文部省の推薦をうけたのは必しも間違ひではありません。大へん結構なことです。「キュリー夫人傳」も同じです。私の譯出した「人間（この未知なるもの）」も文部省の推薦をうけましたが、これは科學の讚歌ではなく、正反對のキビシイ自己反省です。

さてパストウールの研究も最後を急ぎませう。もう「無双原理の研究」を第一期の第一期からよく読んで下さつた方々には分りきつたことでせうけれど、念のために、パストウールの最大の光榮、完成した狂犬病についてだけ、も一度ふれておきませう。

(一) 免疫の原理——これについてはいろ／＼な學説がある様ですが、皆さんにはもうお分りでせう。それは一つの中毒現象にすぎません。つまり西洋醫學の半分であるアロパシー（他の半分がオメオパシー——これはおもしろいことに日本には餘り知られてゐません）の完成、最高最大の成果であります。これはもうアロパシー西洋醫學の終點です。（オメオパシーの詳しいことは拙譯「西洋醫學の新傾向」に詳しく出てゐます）結局西洋醫學は治療醫學が本質であつて、よ

しや豫病醫學や西洋衛生學が完成する日があつても、この終點の五十歩も百歩も手前でせう。

それでは中毒現象とは何か、とおたづねになるのですか？ ちやまだよく無双原理がお分りになつてゐないのですね。いや、正しい食し物をいたゞく生活——無双原理と一枚の生活、理論と實際を生活する「行」をまじめにおやりになつてゐないのですな。これは驚きました。降参します。そんな人なら始めからお話するんぢやなかつた！ あゝ！ それでは無双原理の研究ぢやなくて無理の研究です。どうか生活を一寸も一分も遊離しない無双原理を體得して下さい。無双原理を食物治療法や賣藥と間違つてもらつては大へん迷惑ですし、また大へんな目におあひになるでせう。

中毒現象は體質の問題になります。體質學はヤツト生れたばかりの赤ン坊で、醫學や生理學程度の知識さへまだもつてゐません。だからこゝで體質學を説くとなると大へん、また一冊の本をかゝなくてはなりません。それは無双原理體質學で、とても、とてもおもしろいのですけれど、今は時間がありません。いづれ、かゝなくてはなりません、今はカンベンして下さい。「無双原理の體質學」など、云ふ厄介な本を私が書かなくてもいゝ様に、皆さんが魔法のメガネをしつかり磨いておはめになればいゝのです。それで體質學に關するものを一、二冊もおよみになれば

55 免疫の原理

卒業です。體質學者は「體質の本體は不明である」と正直に斷言してゐます。(あゝ體質が分らないのです！)その上「永久に分らないだらう」とまで丁寧につけ加へてゐます。丁度バストウール、いやあらゆる偉大な科學者が異口同音に「生命と云ふ未知の大陸には現在の科學は一步も這入る事は許されな」と云つてゐると同じです。彼等科學者は最もキラヒな「神秘」「不可思議」「不可知」の大きさ——暗黒の大陸、いや未知の世界をハツキリ知つてゐます。これを知らないのは、何でも知つてゐる様に云ふ人で、實は何も分らない人、ホントウの科學者ぢやない人です。この邊のことはカレルの「人間(この未知なるもの)」をおよみになるとよく分ります。ロマン・ローランの如きよく考へる人でも「生命の原則を發見する偉大な人が出現するまで、此の世の不幸はつゞくであらう、人類の悲惨な運命はそれまでドウにもならないのだ」と云つてゐます。タゴールでさへ物と心、東と西を調和させ、統一するある「偉大な觀念」を待望してゐるのですもの。

## 一、二、體質と中毒の原理

かんたんに中毒の本質をお話しませう。無双原理の分つてゐる人はお笑ひになるでせうが、まあ聞いて下さい。私共は體質を▽と▲に分けます。ヒポクラテスやアリストートルの昔からクレツシユメーアの性格學までを十把一からげにしてゑす。シゴウヤシユレジンガの學說や、最近のアレルギー體質の學說や、あのベートオベンの室で自殺したワイニングルの性格學、さては内分泌腺型體質、植物性體質、神經症體質、それから一切の異常體質、パラノイヤツクまでを綜合して▽▲のたつた二型に分類するのです。メンドウですから表にします。

▽**陰性**體質——憂鬱質、粘液質、すんなり型、早發性痴呆症型、バセドウ型、喘息型、末端肥大症型、腦下垂體前葉機能亢進型、生殖腺機能減退型、シンパチゴトニー、植物性特殊體質、ノイローゼ、胸腺淋巴性體質、浸出性體質、腺病質、神經關節性體質、無力性體質、長頭型、A型、AB型、B型、陰氣な精神病一切——つまりハムレット型

▲**陽性**體質——燥狂質、多血質、づんぐり型、舞踏病型(バラリジス・アジタンス型)、心臟型(所謂心臟の強い人)、短氣な人、ガツチリ型(闘士型)、腦下垂體前葉機能萎縮型、生殖腺機能増進型、ワゴトニー、所謂千枚張りの面の皮型(厚顔型)、無神經型、胸腺萎縮型、カチ／＼型體質(黒くしまつた固い肉體)、スポーツツマン型、弾力ある體質、筋肉型、短頭型、O型、陽氣な精神病一切——つまりドンキホーテ型。

この外いくらでもあります。この▲性體質には千枚張りだの、カチ／＼型の私の思ひ付いた名が相當ありますが、▽性體質の方にはありません。これは體質學者に醫學出、つまり陰性病人相手の▽性人が多いからです。(▽▲合併型もある)

さてこれらの體格、性格、體質がすべて日常の食物から出来るのです。すなはち▽性の食物( $\frac{K}{Na} = 5 \text{以下}$ )を多くとれば▽性の性格や體格や體質になり、▲性の食物( $\frac{K}{Na} = 5 \text{以上}$ )を多くとれば▲性の性格や體質や體格が、お好みのまゝにできるのです。もうこれは皆さん體驗済みです。

だから陰性の體質を作つたり、陽性の體質を作つたりする秘密はお分りです。そこでその上に陰性の體質を陽性にして、陰性の病氣を克服した體驗をよく／＼考へ直して見れば、體質と云ふものが一そうよくお分りせう。

さて中毒現象です。陰性の人が陰性の生活条件をますます強化して行くと（たきへば甘黨がますます甘黨になつて行くと）體質はますます陰性になります。追々「馴れ」と云ふ現象を現はします。一サジの砂糖をあまく感じた人でも、追々二サジ、三サジと多くしないと甘く感じなくなりません。これは陰が極まつて陽になつて行くことだ、と云つてもよいのです。これが生命の特徵です。あくまで耐え忍ぶのです。適應性の本質がこれです。蛔蟲などわかすのはもうその極限です。結核菌などいろ／＼な微生物を繁殖させ培養するのはもう極限を越えたときです。病的現象です。お酒でもドン／＼修業しますとつひに極限に達します。そして泥酔したのが一時的極限で、血圧亢進、動脈硬化などが慢性的極限です。腦溢血は極限をこえた處です。蛔蟲の様なのは實にスバラシイ生命の適應性、宇宙の秩序の存在を明かにするものです。蛔蟲がわくと云ふのは蛔蟲の生長、培養に好適な条件があると云ふことであり、蛔蟲がゐて、繁殖し、生長してくれるために、ドン／＼甘いものを入れても、みんな蛔蟲がたべてくれるので、甘黨でない人なら容易に斃れる程甘いものをたべてもノビてしまはないでゐられるのです。巧妙なカラクリです。だから甘黨をやめずに蛔蟲だけを追拂ふ様な激烈な薬をとるとトンダ目にあふ事もあり、またソモ／＼不可能なことでもあるのです。極限に達するまで、すなはち陰（又は陽）極まりきつて了ふまでは

人間は自由にムサボリを許されてゐるのです。しかしそこまで行くと嚴然たる限界があります。これが宇宙の秩序です。

人間の外界に對するこの適應性の極限はおどろくべく大きいものです。しかし悲しいかな人間は習慣や、嗜好や、享樂本能によつて、つまり日常の食生活の偏りによつて、この極限をスゴク縮小するのです。が元來、人間の適應性は大へん大きく、その極限は萬物の中で最大であります。最大の適應性をもつてゐるのが人間です。植物や動物になると著しくせまく、少し氣候や土地が變つても、もう適應性の限界を出て了ふのでみらなくなつたり、不妊症になつたり、枯れたり死んだりします。バナ、の木を内地に植ゑかへて見ると分ります。ミカンの木を海岸から一里か二里はなれた山中に植ゑると消えてなくなつて了ふのでも分ります。ところで人間は何里、何百里、何千里移動してもリツバに生きて行くのです。猿など津輕海峡を越えれば全滅してしまひます。熊でも、虎でもそれ／＼限られた生活地帯があつて、それを越す事はできません。この適應性の最も大きいのが人間で、それだから人間を萬物の靈長だなど云ふのでせう。適應性の限界を定めるのはその數千年、數萬年にわたる食生活であります。適應性の大きい食物を常食とする民族ほど廣い限界をもつのです。穀物中では米が最大の適應性をもつてゐます。この問題をこれ以

上研究することは別のキカイにさせよう。

さて動物は人間よりよほどせまい適應性しかもつてゐませんけれど、それでも、正しい食物をたべてゐる限り、あらゆる困難(寒暑)病氣によく耐えてリツパにその限られた生活地帯では健康に生きて行くことを許されてゐます。だからこそ何萬年の昔から生きてゐるのです。これが亡びるのは天災地變、環境の地質學的大變化か、人間の殺戮、虐殺がある時に限ります。

ではナゼ狂犬病の様なものがかかりますか？ それはかんたんです。人間が餌育するか、人間が彼らの食生活を不自然にするからです。全て動物の恐い病氣は家畜にかぎられてゐるのを見てもお分りでせう。大は牛馬から、小は蠶と云ふ家畜に至るまで、馬の流行性貧血でも、牛のトリコモナスでも蠶の四つの流行傳染性でも、みな人間の與へる食物の不自然さからです。養鶏や養魚にしてもみな同じです。メン羊腰痲病もおなじこと。

### 一三、パストウールの犯罪

またしても免疫の問題がそれて了ひます。免疫學が自ら免疫性をもつてゐるらしいです。

人間は最も大きな廣い自由の天地を與へられてゐるのですから大いにその自由を楽しんでゐるのですが、土地を變へずに、食物だけ「珍しい」と云ふ單なる舌の尖端だけの問題で、遠い國から取りよせて食べたり、自分は働かずに他人に働かせて遊んでゐて食べたり、資本主義經濟など云つて營利を唯一の指導原理とした着色、着味の化學的加工食品や人工栽培、養殖の産物を大量に作つてたべたり、重商主義だの、國際主義だの交換經濟など云つて貿易を大いに盛んにして、異國の珍味美食をむさぼり食ふものですから——つまり空間(郷土)の秩序と、時間(季節)の秩序や、その數千年間の結晶である傳統と云ふ秩序を破るものですから、本來、生來、數千年、數萬年來の祖先の獲得してくれた適應性を失つて了ふのです。これが追々新しい病氣が現はれ、それが増す理由です。

それで弱まつた人間がつひには人間より適應性の限界の小さい動物の適應力を拜借しよう、と云ふのが免疫法です。これを一かどの大發明、大發見だと思ひ込み、後天性免疫法の完成などウヌボレてゐます。がそれができるのは、人間に残された最後の適應性の總動員——「馴れ」中毒性のおかげなのです。だから人間はこれによつて追々劣弱になります。當然動物よりも劣等な適應力しかなくなるのです。極端に申せば、動物の一種の寄生蟲になるのです。厄介な恐い寄生



蟲です。征服した民族を奴隷とし。飽衣美食したローマ人の偉大な世界帝國が北方や東方の蠻族に侵略され、征服され、崩壊した様に、劣等動物の膏血によつて安樂な享樂生活をしようとする、或は始めてゐる人類は、近い將來に南方や西方や暖國から來る蠻族に征服され死滅して了ふのではありますまいか。すでにその蠻族の先發部隊は我々の心膽を寒からしめ、人間は巨億の富をその防禦のマチノ線、萬里の長城建設のために支出しつゝ、上を下への大恐慌を起してゐるではありませんか。新しい南方の蠻族！ その名は流行性感冒！ 肺炎！ 肺結核！ 微毒！ 癌！そして最も強大な機甲化部隊精神病（思想悪化、意志薄弱をこめて）！……（アメリカでは精神病が結核の何倍と云ふ數字になつてゐます。過激な思想や意志薄弱（無氣力型、扁平足、夜尿、内辨慶、外幽靈型、氣の弱い子供）などもリツパな精神病と認められてゐます）

私共は安閑としてゐますが、もう敵の蠻族は身近に迫つてゐます。私共は十重、二十重に包圍されてゐます。新しい蠻族は「見えない機甲化部隊」「見えない殺人光線」ですから、我々はノンキに構へてゐますが、まあ各國の死亡統計をごらん下さい。右に上げた様な死の手は私共のノド首を完全に見えない鋼鐵の鎖でジリ／＼しめ上げにかゝつてゐます。文明國ほど、免疫法の發達した國ほどこれらの死亡率が増加してゐるではありませんか。それでも我々は一心に文明國の

マネをし追従し、勇敢に突進すべきでせうか？ それは無暴ではありませんか？ あゝバスターールは人類を微生物、病魔大王の軍勢に人類を賣つたのであります。こんなことならブルーレルの狂犬病豫防法の方がよほど罪が軽い。

以上クダ／＼しいバスターールの罪狀を數へ上げましたが、もう最後の判決を下しませう。

- 一、バスターールはその七十餘年の一生を通じ、よく人間に眞劍さの偉大なることを教へたる功によりその生涯の努力の結晶たるバスターール研究所なるものゝ存續を許す。
- 二、たゞし、その創始完成せる細菌學なるものは、神の創りたまひし細菌の虐殺を企て、却つて人類を細菌以下の位置に低下せしめ、人類以下の下等動物、微生物ウイルス等をして人類全滅戦争を開始せしめたるにより、こゝに「人類の大恩人」なる名譽ある稱號の廢棄を命じ新に「微生物、下等動物の大恩人」なる稱號を附與す。
- 三、今日以後よろしくバスターール研究所の一部を博物館となし「微生物、下等動物の大恩人」の像及び、免疫法に關する一切の機具を陳列し一般人類の觀覽に供すべし。但し觀覽料を徴收するを得ず。
- 四、又バスターール研究所の一部及庭園全部を適應性、體質、身土不二の原則、正しき食物等

の研究室に改造し、大いに無双原理の研究を振興し、如何なる微生物にも犯されざる人間を造る正しき食生活こそ齋家、治國、平天下の根底たる修身術なることを廣く普及するための健康學園となすべし。

五、B・C・G血清等の頒布により得たる利益に相當する金額を過料として納付し、これをもつて右第三項及び第四項の費用を支辨すべし。

六、微粒子病低溫殺菌法、炭疽病豫防法、狂犬病發病豫防ワクチン等の發明を以てパストワールはあるひは牧畜、酒精飲料工業等の危機を打開し、あるひは、病弱體質者を救助することに成功せるも、ワクチン豫防法によつて却つて生命を失ふもの亦尠からず、その上これを割引するもこれらは全て單に物質的利益を増加せるのみにて、しかもその結果、民族、國家、人類全體の體質惡化を招き、道義觀念を喪失せしめ不治の疾病——結核、癩、精神薄弱、神經體質、精神病——等の激増に貢獻せるところ尠からず、全人類滅亡を目ざす疾病魔王國をしてその大進軍に成功せしめたるにより、これらの發明は人類の生命に空前の脅威を招きたるものとして今後使用を嚴禁す。

七、免疫法は宇宙の秩序の表現なる適者生存(不適者滅亡)の原則により、神が人類を向上せし

めんとなし給ふ攝理を覆滅せんとする兇逆不逞享樂思想なり。以後これが流布を禁す。

#### 一四、人類を亡ぼす者は人間なり

有名なパストワール低溫殺菌法はブドー酒、ビール、牛乳等を變敗する菌を殺すもので、つまり業者のためには非常な利益であります。人類に有害な細菌(たとへば結核菌)は少しも殺すものではありません。反つてその繁殖を助けるのに役立つ位の効能のあるものです。このためにビール、ブドー酒等の工業は一大發展をいたしましたから、従つてアルコール性飲料の大量生産を招き、こゝに人類や國家や民族の體質の恐るべき低下を來たすことになつたのであります。こんどの世界大戰で二十億フランの巨費を投じたマジノ將軍の驚嘆すべき長城が完成してゐたにも拘らず、餘りにアツケナイ程もろく敗れ、アンドレ・モロウをして「フランス敗れたり」を書かして巨萬の富を得せしめる様なことになつて了つたのであります。三千五百年の昔酒を發明した者があつた時「あゝ、後世必ずこれをもつて國を亡ぼすものあるべし」と云ひ、酒を禁じた夏の禹帝の如き王様——指導者——があつたら、パストワールもたしかに獄屋につながれたか、斬罪に

處せられ、フランスも敗れず、かくも大きな罪惡を人類全體に及ぼさずにするだけでせう。

又、免疫の原理は前にものべました様に、目的のためには手段をえらばない最もエゴイストな方法です。人間の幸福のために動物の力をでも借りるのです。人間を強くすることを考へずに、人類の獨立を犠牲にして、その幸福安寧をはかる方法を發明するために苦心慘膽するのです。どうしてこんな間違つた考へを抱くに至つたかと申しますと、それが親の教育の罪であります。ルキの父ジョセフ・パストウールは陽性な勤勉な良いお父さんではありましたが、子供にかけてはトテモ甘すぎたのです。それは彼のたくさんの手紙にハッキリ出てゐます。不自由のないゆたかな家庭で、餘りに大切にされ、厚い保護をうけた子供はすべて無氣力となり、全く獨立性のない自己本位のエゴイストな享樂を追ふ唯物的なケチ臭い人間になります。ルキは幸ひ貧乏な家に生れましたから無氣力にはなりませんでしたが、可愛想に大へん唯物的なエゴイストになつてゐたのです。だから免疫法と云ふ様なズルイ、エゴイストな、唯物的な方法を發明したのです。恐るべきは誤つた幼時の教育、親の教育であります。こんな方法が大いに歡迎されたのはフランス人全體、いや西洋人全體がたしかに唯物的な方向にかたよつてゐると云ふ事を意味します。

寒いと云へば厚着をさせ、暑いと云へば氷やアイスクリームを興へたくなるのが親の情けであ

りますが、これがソモソモ子供の體格を悪しく、體質を弱くするのです。そしてその上最もいけないのはこの方法が獨立心、克苦奮闘の精神千萬人と雖も我れ征かむの精神を窒息せしめて了ふことです。寒いと云へば「走れ！汗の出るまではたけ！」と云ひ、暑いと云へば「わきかへる泥田に草取りをしてゐる人を見よ！ナマケテゐるから暑いのだ」と教へればいゝのです。いやもつといゝのは、そんな事をブツ／＼云ふヒマもないほど仕事をさせればいゝのです。それも仕事をせねば食べさせない様な規則を設けてやるのが一番いゝのです。最上の方法は文句や不平を云ふヒマもない程、セツセとはたらかねば食つて行けない様な貧乏生活です。子供は大人のマネをするものです。セツセと親がはたらいてゐれば子供も自然はたらくのです。親が遊んでゐたり、樂をしてゐたら子供はハタラクことに楽しみをおぼえるものではありません。氣の毒なのは（ジョセフ・パストウールの様に）せつかく貧乏な生活を興へられながら自分は汗まみれになつて寸分のスキもなくはたらいてゐるのに、子供にはハタラクことを教へず、樂に、自由に勉強などさせ、つひにエゴイストな、無能な、有害な人間にして了ふ人々です。

犬や兎でさへもつてゐる自然免疫性、抵抗力をまで借りて人間を救はうと云ふのは、暑さ寒さを防ぐのに氷やアイスクリームや温いキモノを用ひるのに比べて數等念の入つた間違ひです。「寒

暑未だ人を破らず、不修人を破り、道を破る」と古人は喝破してゐます。不修とは身を修めないこと、修身しないこと、修身とは素問に定義してある様に『飲食節あり、起居常有り、以て修身の法と爲す』で、節とか常とか云ふのは「宇宙の秩序」マコトの道、それを簡素な體系にまとめたのが無双原理であり、それを簡易に實生活と一枚にするのが私の三十年主張して來た『正しき食生活』であります。

人間が犬や、猫や、牛や、馬の御厄介にならないですむ様な偉大な、人間らしい免疫力、抵抗力を奪還するためにはこの正しい食生活を確立し、實行によつて體得するだけで十分です。それはおどろくべき効果をもつてゐます。私はそれを保證します。私はこの身土不二純正食生活によつて十數萬人の人々をホントウの健康の方へ指導して來たのです。食物で病氣を治す秘密はこゝにあるのです。人間は食物によつて生れ、生長し、活動し、思考するのです。だから正しい食を取れば正しい體格、體質、性格、思想を確立することが造作もないことになります。正しい體格、體質こそあらゆる疾病に對する完全無缺な免疫法であります。正しい性格と思想こそあらゆる過激思想、偏狭、兇逆思想、享樂思想に對する最高の免疫性を與へます。

狂犬病の如き陽性の病氣は、陰性に偏した食物（アルコール、クダモノ、サトウ、清涼飲料水

アイスクリーム、菓子、湯茶）を多く多つた陰性の人だけに恐るべき毒性を發揮するのです。體質が陰性食によつて狂犬病毒の培養基、擴大器になつてゐるからです。恐るべきは體質です。その材料である食物です、その取り方です。恐るべきは秩序を知らないこと、修身の術を知らないことです。あゝ不修人類を亡す！人を亡ぼすものは病氣にあらずして人間なのです。

無双原理の十二の定理（「宇宙の秩序」参照）をよんだ方はもう狂犬病に對する自然免疫法の秘密をお分りでせう。陽は陰を好むのです。狂犬病毒は陽性ですから陰性體質を好むのです。だから犬よりも兎の方が抵抗力が少いのです。猿はクダモノを食べますが、犬よりは活動家で、筋肉もしまつてゐます。だから犬よりも抵抗力があるのです。しかし大きい猿即ち陰性の猿の方がたしかに小さい猿より抵抗力がよはいでせう。それに犬にしても、兎にしても、猿にしても實驗用のは人工飼料ですから自然の野生のものとは餘程體質が變つてゐるでせう。事實狂犬病は恐しい傳染をしたことがあります。この秘密さへ分つてゐたら狂犬病のない國でも狂犬病を自然に發生させることは出來ます。ウント陽性の食餌を與へればいゝのです。

だから咬まれても狂犬病にならない様な免疫性をもちたいなら、鹽のきいた野菜食を常としてゐればいゝワケです。昔の日本人がそれでした。だから日本には狂犬病が西洋での様に大昔から

ヤカマシク云はれたり、恐れられたりはしなかつたのです。狂犬病の様な恐しい猛毒に對してさへ十二分に抵抗する力を正しい身土不二の純正食生活は與へてくれるのですから、他のいろくな病氣に對する抵抗力は云ふまでもありますまい。こゝにその昔日本が不老長生の國、蓬萊島、扶桑國などと呼ばれたワケがあります。醫術が日本に發達しなかつたワケもこゝにあるのです。つまり醫術の必要がなかつたのです。

大道廢れて仁義あり！

法律の生れるのは悪人の多くなつた證據！

大病院が増加するのは無能で有害な醫學や衛生學のおかげ！

要するに狂犬病に對する免疫性をもちたくば、陽性な人になればいゝのです。鹽のきいた植物性食を常とすればいゝのです。反對に水くさい或は砂糖のきいた、美食邪食に常に親しみ、アルコールをたしなみ、イモ類、菓子を食ひ、南方の珍菓（バナナ、パイナップル、マンゴ、ミカン）等飽食すれば陰性な人になりますからあらゆる陽性な細菌の培養基となります。たとへば結核菌の培養基として最も適當なのは、卵、馬鈴薯、牛乳、砂糖或は肉汁だと細菌學者は教へてゐます。つ

まりこんなものをふだんに食べてゐれば身體全體が結核の最上の培養基になるわけ……………

## 一五、パストウールの教訓

パストウールは何を私に教へたか？

先づ眞剣さと貧乏のありがたさです。しかしそれだけではありません。一千頁以上もある彼の傳記はその外にもいろ／＼なものを教へてくれます。

一、一生を貫く眞剣な努力も、正しい指導原理によつて方向を定めるのでなければ恐しい結果をまねくと云ふこと。

なるほど、科學者にとつてそれは覺悟の前であります。彼の同僚クロード・ベルナル、あの實驗醫學の創設者はパストウールを賞讃するときハツキリ次の如きコトバをつけ加へてゐます。

「偉大なる科學者とは新しき理念をもたらし、又誤りを破壊した人である。故に先人を尊敬しなかつた人である。されば彼も亦、後進から同様に尊敬されないので當然の運命である。實驗科學においては如何なる學者も絶對不動の眞理の主唱者たるものではない！」

しかし私は尊敬すべきクロード・ベルナルに反対です。私はパストウールやクロード・ベルナルやキユリー夫人やエールリツヒや、その他あらゆる偉大な科學者、或はあの「アエリン」を心から尊敬します。彼等はみな眞剣、不撓不屈の努力、貧乏と苦難なしにはたとへ後日葬られ様な業績でも完成されるものではないことを深く教へてくれるからです。そしてやゝともすれば安逸を求める私に、強い／＼ありがたいムチをあて／＼くれるのです。

二、彼の一生七十餘年は「陰あれば必ず陽あり」と云ふ無双原理、「陰極まる處必ず陽生ず」と云ふ定理第十一、「陰は必ず陽を引く」(定理第四)等十二の定理の眞實性を一々證明してくれ

た。(「宇宙の秩序」第五六頁を参照)  
 三、宇宙の秩序をおぼろげながらも知つてゐれば、酒石酸の研究でも、狂犬病ワクチンの研究でも、おそらく五年も十年も死に物狂ひの努力をせずと完成されたに違ひないと云ふこと。おそらく一年で十分であらう。ことによると一ヶ月でも一週間でもいゝだらう。

私はかんたんに彼の努力のアウトラインを寫しましたが、ラドの傳記をおよみになると一つの

研究でも、それこそ命がけの血まみれの死闘であることが分ります。ラドの本では、彼の一つの研究が僅か十頁か百頁に寫し出されてゐますけれど、なか／＼どうして、實際の記録はそんな生やさしいものではありません。詳しくかけば一つの研究でも千頁の本にはなりません。これは何か一つの研究、一つの事業を完成した人でなくては分りません。「五十歳にして四十九年の非を知る」と云ふコトバがあります。私は三十年間死に物狂ひの血まみれの戦ひの生活を送つた後にはじめてドンナ事業でもまづ私の様な者は少くとも三十年やらねば完成するものではないと云ふことをつく／＼悟りました。それにつけてもパストウールの傳記には、宇宙の秩序、永遠なるものゝ姿を見る者は幸せなるかな、の感を今さらながら深くされます。そして「此の世にて貴ばるるものは神の前にて卑しめらるゝ者なり」と云ふコトバの恐ろしいほどの眞實性をヒシ／＼と身にしみておぼえます。

私は若き人々に告げなくてはならない――

『パストウールの成功の秘密はその眞剣味にある』

『パストウールの如き成功は千萬人に一人である！』

『よしや死後、審判の日に光榮を剝奪されることを恐れないにしても、一生を間違つた方向に

向けて努力することは痛ましいではないか！』

「勇取にも先人を否定し、自分も亦後人から否定されるのが科学者の運命であるとは云へ、それでは餘りにはかない。樞花一朝の夢ではないか。古來、東洋の聖賢、學者には萬代に語りつがれる人々がすくなくはない。科学者にして聖賢の如く後世に残る事業を完成する方法はないか？ 大いにある。宇宙の秩序を體得した科学者となればいゝのだ」

『生きてゐる間だけ、位人臣をきわめ、最高の名譽と最大の光榮につままれたらいい、死んだ後はドウでもいい、と云ふのもいいが、時にふれ折にふれてバスターールでさへ、もらった様に百年、千年の後の吾が事業の没落、幻滅を恐れる不安、憂慮を抱いてゐて、はたして眞の生活のよろこびがあるだらうか？』

男の子はも空しかるべき萬代に語りつぐべき名はたてずして

と云ふ歌があります。日本人は全てこの歌の心を心として生きて行くのでせう。しかし、クロード・ベルナルのコトバによりますと、科学者はそんな心をもつてゐない様であります。むしろ反對の心をもつてゐるのではないかと思はれます。人類全體の幸福の殿堂を建設するために、自らを名もなき捨石にする決心であるのでせう。私はドチラも結構だと思ひます。科学者になる

なかれ、とはユメにも申しません。たゞ宇宙の秩序、マコトの道をましくらにすゝみたいと思ひます。それは時に苦難にみちたものでもあるのでせう。或は光榮につままれるかもしれせん。何れにもあれ、宇宙の秩序に法つた生活をする事、云ひかへれば幸せな幸せな一生を生きることが大切だと思ひます。幸福でない、顯微鏡や電子ケンビ鏡でも不幸が見付かる様な生活は罪惡です。不幸の見えない影が忍んでゐてもそんな生活は罪惡です。

人は誰れでも幸せです。もし不幸せだつたらそれは自分の罪であります。人の苦しみと惱みはその人がマコト(宇宙の秩序)をどれほど知らないかを示すバロメーターであります。

長々しい下手な話をよく辛抱して下さいました。實は私も退屈しました。勇ましく科学者の道を進む若き同志諸君！ 千人、萬人に一人出るか出ないか分らない様な偉大なバスターールの後継者たることを念願とさるゝ勇敢な青年よ！ 諸君はバスターールの眞劍に負けない眞劍をもつてゐるでせう。けれどもそれだけではダメです。トテモ彼らと太刀打ちは出来ません。なぜならあちらの人々の方が先輩ですから。うまく行つたところで彼等の追従者になるだけです。數多き科学者の中に一人や二人伍することは、日本の名譽から見ても、人類の幸福から見ても、何のタ

シにもならないことです。こゝ七、八十年來に我々がうけた科學、西洋思想の恩恵に報ひるにはあちらにないものを提供することです。科學を包擁しながら、科學を超越したものを出すことです。(これが實は東洋や西洋の平和な秩序を樹立する秘密であります)こゝに無双原理の實用性があるのです。先づ健康と智恵、美と力を體現するために正しい食生活、身土不二の食生活、神ながらの生活を行じて、われらの祖先の眞實性と偉大さを體得することから始めて下さい。これらの最後のコトバは三十年死闘して來た私の體験をちよめた結晶であります。

先づ健康! です。その健康を確立する高遠な理論でさへ、カンタンな食生活の「行」にしてくれる無双原理、ムスピの原則はユカイなものではありませんか。

附 録

食 の 秩 序

フランス料理は先づアペリチフから始まつてオール・ド・ウヴルースープ(コンソメ又はポタージュ)―魚―肉―ヤサイ(御飯モノ、又はマカロニ)―サラダ―クダモノ―アイスクリーム(又はシヤベツト又はお菓子)―コーヒなど云ふ秩序で出る。このコースの間に二、三回ブドウ酒が取りかへられ、食後にはリキュールが出る。これがフランス料理の秩序である。これを逆にコーヒから始めたり、ビールとブドウ酒の秩序をまちがへたりすると、セツカクのお料理を忽ち腹痛をおこし吐いたり下したり大變なことになる。

日本料理でも、まづお汁から始まつて、最後にお香のモノで終る。これを逆にやつたら大變だらう。支那料理でも、もう動けないほど頂いて、最後にひそかにバンドをゆるめ、ズボンのボタンをはづす頃、又しても洗面器位の大きな鉢が出るので、肝をつぶす。それが魔呵ふかしぎの椎茸湯。この椎茸湯を逆に始めに取つたら大變なことになる。しかし最後にこれをのむとスーツとして、いままゝで苦しかつた太鼓腹が楽になる。椎茸湯の功德たるや恐ろしい。



西洋人はドンナに間違つても食前や空腹時に菓子やクダモノはたべない。日本人は時々空腹をお菓子で充たしたり、おめさにお菓子を頂いたりする。これは後日、實に恐しい結果を招く。精神薄弱、虚弱兒、異常體質等々……。

日本料理は秩序をまちがつても、西洋料理ほど恐しいことはないが、それでゐて、その秩序は西洋料理よりはるかに進んでゐる。即ち「飯三口、茶一ハシ」だの、「馬鹿の三杯汁」だの、「ナメ箸」、「うつり箸」、「汁かけ飯」、「かきこみ」等々……口音をたてたり、舌づみをうつたりおしやべりをしたりすることも下賤の所作とされてゐる。「飯三口、茶一はし」の原則を守ればドンナ大飯食ひでも、宴會の料理は大部分残る。それを折に入れて持つて歸つて、家族に分けるのが作法であり、禮儀であつた。この風は京都にはつひ最近まで保存されてゐた。

小笠原流の食事作法はこの食生活の秩序を藝術化した古典、傳統の緒晶、生命論理學に基礎をおく日本文化の精華である。それは生理學的専門知識を日常生活化した日本人獨特の藝術的手法である。この偉大な生活藝術、處世術の眞價を理解するには先づ身土不二の眞生活の原理を守り正しき食生活を數年實行し、無双原理世界觀むすびの原理を體得しなくてはならない。

## 『未開人』の精神と日本精神

大東亞の精神地理學  
無双原理の研究Ⅲの五—九

435  
254

### 無双原理講究所

#### 目的

正しく清き生活をうち建て世のため、人のため、長く流らざる社會奉仕生活をなさんとする人々に、新世界觀「無双原理」の普及につとめんとす

#### 事業

無双原理指導員の養成、食養健全生活の指導、無双農場の經營、パンフレットの發行等

#### 會員

會員（無双講中）は終身制です。加盟金拾圓を納付すれば機關誌「むすび」の配布を受けたり純正食品や出版物の頒布を受け各種の講習會や催しに参加出来ます。「むすび」の友一ヶ年一圓、毎月「むすび」の布をうく、之にはその季節正しい食物と献立と料理出てゐます

昭和十八年六月五日印刷  
昭和十八年六月十日發行

【非賣品】

不許  
複製

著者 櫻 澤 如一  
發行所 野々山 良 一  
東京市芝區三田小山町五  
印刷所 活躍社印刷所  
東京市芝區三田小山町五  
印刷所 活躍社印刷所

櫻澤一如著作目録一ノ部  
 [無双原理の研究]叢書 第二期及第三期

第二期

- 一、 生命現象と環境
- 二―八、 新しい栄養學
- 九、 永遠に勝つ者
  - 全てを統一する原理
  - ガンジイとタゴール
- 一〇、 パストウールの審判
  - 『人類の大恩人』の犯罪
- 一一、 食物と人生
  - 人生のあらゆる方面、哲學、宗教、科學、經濟等と食物の關係を隨筆風に。

第三期

- 一―二、 P.U. 中國四千年史
  - 歴史を『魔法のメガネ』で體讀するおもしろい本。
  - 新『人生讀本』
- 三―五 P.U. 細菌の國探險
  - 第二の『魔法のメガネ』
  - 新西遊記、一生絶對免疫法。
- 六、 P.U. 新しい生命經濟學
  - 英米ユダヤ經濟學の批判と更生法、生命と幸福を本位とする新しい經濟學。
- 七、 安南の悲劇

終